加茂臺藩之獨秋

ル 4
328
6

呂門
328
6

北越雪譜二編三之巻

目録

○鳥追樽 順列上下ハ
○地獄谷の火
○無縫塔
○年賀の哥
○菅神御傳畧
○異獣
○弘智法印
○白烏
○浮嶋
○美人
○雪霜
○越後の人物
○北高和尚
○逃入村の不思議
○田代の七ツ釜
○火浣布
○土中の舟
○両頭の蛇
○石打明神
○蛾眉山下の標準

○苗場山
○鶴恩ふ報ゑ

通計 二十三條

○三四月の雪

右異獣より以下ゑりけて四の巻とも

北越雪譜二編巻三

越後 鈴木牧之 編選
江戸 京山人百樹 増修

門 孫 巻

○鳥追櫓

農家市中正月の行事ふ鳥追とゆふ事あり此事諸國ゑもあるべ其ゑを処其国ふよりてさゑぐゑる事ハ諸書ふ散見せり江戸の鳥追といふハ非人の婦女音曲をるを女太夫とて木綿の衣服をうつ〻く着ゑ〻顔を粧ひ編笠をかぶり三弦ふ胡弓ゑどをあらせ賀唱をゆ〻ろくうたひ門〻ふ立て銭をもふ此事元日よりちゞめ松の内をゑぎりとも松をぎてもあり〻所もありとゞ我越後ふハ小正月の小正月とハ十五日以下をゑ ちゞめ鳥追櫓とて去年より取除ゑきたる山ゑも雪の上ふ雪を以て高さ八九尺あるひハ一丈余ふも高さふ

應じて末を廣く雪ゆて樽を築立て上ふ登るべき階をも雪ゆく作り頂を平坦ふ〻〻松竹を四隅ふ立て為を張りて廣き心ふ内ゆハ居るべきやうふむ〻〻ろを為きゐるべ小童等て上ふあり〻〻物を喰ひゐるべ〻て遊び鳥追哥をうたふその一ッふ「あのとりやどこ〻〻ゐつてきたゝ信濃国ゐつてきたゝゐぬのくふ〻〻ゐつてきたゝゐのふをもつてゐつてきたゝ柴をぬくべゐつてきたゝ芝のとりも鳥かゞのとりも何辺のさゐへだのとりハゐつてもゐ〻〻もぢめも早苗田雀鳩ゐどりたちやゞ立可ゐゞ立可ゐ」「巳等裏ゐ〻〻ゐ〻〻」

ゐるひハかの掘揚山を雪をもて山を手所の上ふ雪を以て四方ゐる堂を作りたて雪ふて物をゐくべき棚をもつくりむ〻ろをもきつ〻孫ゐるべやうんぜんやうんぜん林此雪の棚ふゐき物を煑焼し濁酒ゐどのを小童大勢雪の堂ふ遊び同音ふ鳥追哥をうたひ終日てふゆきて〻遊びて〻をまれ暖国ふハゐき正月あそびゐり此鳥追樽宿内ふ〻〻つとゐ〻作り

黨をゐ〻てあそぶ

○雪霜

前ふも為ぢ〻〻ゐるぢ〻〻北国中ふ〻て越後ハ第一の雪国ゐりその中ゆも魚沼古志頸城の三郡を大雪とも毎年一丈以上の雪中ふ冬をゐゆもぢ寒気ハ江戸ふさまぢ〻ゐる夏ゐ〻と江戸ふ寒中せ〻人ゐり五雑組ふゐる霜ハ露のむもそぶ所ふ〻て陰ゐり雪ハ雲ゐるも所ふ〻て陽ゐり〻〻ふむべゐりかゐる雪中ゐまぢも夏の儲ふ蒔ゐる野菜のゐるも雪の下ふ萠いぢ〻その用をゐも夏ゐもきとゐゆきのたぢひハゐまぢも暖国ふゐる夏ゐ〻その遅きこハ三月ふゐぢめて梅の花を見五月の瓜茄子を初物とも山中ふゐ〻りて〻ハ山櫻のさゐり四月のもゐ五月ふゐ〻ゐる所もゐるゐり

○地獄谷の火

此書の前編上の巻雪中の火といふ条ふ六日町の魚沼郡西の山手ふ地中より火の燃る事をきるせ〜ゞ地獄谷の火の支をもゝせゝゞ
ふくふきるゝ。もゝと我越後ふ名高く七不思議ふかぞへいふ蒲原郡如法寺村百姓荘左門七兵衛孫六ゞ家ふある地中より燃る火ハ普く人の知る所なれども其火より盛大なるハ魚沼郡のうちかの小千谷の在地獄谷の火なり唐土ふ是を火井といふ近来此地獄谷ふ家を作り地火を以て湯を煙〜客を待て浴さしむ夏秋のそゞめきでハ遊客多〜此火井他国ゆきてさゞ越後ふ多〜先年蒲原郡の内或家ゆく井を掘〜ふ其夜医師来りて井を掘〜支を聞家ふ飯る時挑灯を井の中へ入るとのあ〜ゆく井を見て立きり〜ふ井中より俄ふ火をいゞで〜火勢さんふ燃あがりけるバ近隣のものども火事なりとて井中より火のもゆるを見て

此井を掘〜ゆゑ此火ありしとて村のものども口くふ主人を罵り恨けるゞ主人も此火をもてあまして埋るとゞ此地火一ふ陰火といふふちの如法寺村の陰火も微風の気いづるふ発燭の火をゝゞせバ風気手ふ應じて燃る陽火を得ざるゞ燃ゞ寛文のむかし荘右エ門ゞ如法寺村庭ふく鞴をしらひ立る時より燃ゞ〜ゞ前ふいふ井中の火も医者ゞ挑灯を井の中へさげ〜ゆゑ火の陽火ゆく〜もえいで〜とるゝ〜●さて又頸城郡の海辺ふ能生宿といふ北陸道の官路あり此宿より山手ふ入る支二里ばかり小間瀬口といふ村あり此の農家ふ地火をいゞで支如法寺村の地火ふ同じゝゞ此ゆより用水ふ乏しき所ゆゑハ旱のゝゝりハ山ふ就て井を横ふ堀く水を得る支あり時井を掘く横ふくりし時穴の闇きをてゝゝたゝふ炬を用ひるふ陽火を得て陰火忽ち肰あがり人是ゝ為ふ焼死〜けるゝゞ曼等の支ゞをおひたるふ越後のうちゆハ地

火をいづと火豚の地まくいまゞ陽火を得ぞ〜〜発せざるもあらるゝ〜

百樹曰余小千谷ふあり〜時岩居余ふ地獄谷の火を見せんとて社友五人を伴ひ用意の酒食を美奴二人ふ荷〜め余ら京水と同行十人小千谷をそのまゝ西の方・新保村・藪川新田などいふ村〜を歴て一宮といふ村ふいる山間の篆畦曲節て茲ふ抵て行程一里半可あり是日いとふ快晴して村落の秋景百逞目を奪ふさて平山一ッを踰て坡あり則地獄谷へいるの徑あり坡の上より目を下せば一ッの茅屋あり是本文ふいる混堂あり人〜坡の半ふいたり〜時茅屋の樓上ふ四五人の美婦あり〜ふまの〜檻ふよりて遥ふこの人〜を指もありあるひハ笑ひあるひハ名をよびあるひハ手をうちたゝきあるひハ手をあげて〜まわ〜四面皆山わ〜老樹鬱然として翳塞の中ふ個美人を見ること愕然〜是狸ふあらずんバうるゝ〜狐あらんといひけまバ岩居友ごちと相顧て手を拍て笑ふこと小千谷の下さ町といふ所の酒樓ふ居る酌婦の哥妓どもあり岩居朋友と計りて竊ふ此ふ招きて余ふ與させん為とて渠ハ狐ふあらずして〜岩居ふ魅さるゝあり已ふ地獄谷ふて〜皆樓ふのぼり岩居ハ余と京水とを伴ひてかの火を視せ〜む・そも〜茲谷ハ山櫻多あり〜也ふ櫻谷とよびなるを地火あるをもつて四方四五十歩六尺を歩とのふをひろきて平坦の地とす〜地火を借りて浴室とす〜人の遊ぶ所とせ〜とて櫻谷とよびなる処地火のたゝりふ地獄とよぶゝこと花ハさぞ〜溫憤るべ〜・さてその火を視るふ一ッの淺き井を作りなるもの井中より火の燃る事常の湯屋の火よりも盛あり上ふ釜あり一間四方の湯槽あり細き筧あり〜后の山の清水を引き湯槽ふ注

とて湯ハ槽の四方ふ溢るおつるを以つて此湯温うるぞ熱うぞ
天工の地火盡る時ハ人作の湯も盡る期あり見るふも清潔
なる事いつぐ〳〵ぞ此混堂ふ續きて厨処あり灶ふも穴あり〳〵地
火を引て物を烹薪ふ同じ次ふ中の間あり床の下より竹筧を出
し口ハ一寸ばかり銅を鉗て火を出さしむ上より自在をさげ此火
ふ酒の燗をなし〳〵あるハ茶を煎夜ハ燈火ともさて熟此火を視るふ
筧をたゝること一寸ばかりの上ふ燃る扇ふあつげバ陽火のごとく〳〵ふ
消る筧の口ふ手をあてゝ〳〵ろむるふ少〳〵風をうけるのゑ裝燭の
火を翳せバ忽然と〳〵〳〵めることゑどめの如し主の翁が曰この火
夜ハ昼よりも燥烈く人の顔青〳〵ゑるといひ翁が妻水のうち
よりもゆる火を見せやさんと〳〵混堂のうしろふ僅の山田ある所
ふいてり田の水の中ふふ〳〵湧ところあるふつけぎの火をもぐし

ふ水中の火蠟燭のもゆるが如し〳〵差渡ばかりふく此火のゆうふゆる
処ゑうふもあり夜ふいまだ〳〵火をもゆゑ默きて〳〵ずと
いひり余が江戸の目ふハ視る所ことぐ〳〵奇妙あり唐土ハ此火
を火井とゝ博物志或ハ瑯琊代醉ふ見えたる雲臺山の火井も
此地獄谷の火のごとくなれども事の洪大なるハ此谷の火ふ勝らぬ
唐土と日本とを比べるに火井の最第一といひつべし是を見る事
越遊の一奇観なり唐土ふ火井の在る所北の蜀地ふ属ス日の本の
火井も北の越後ふ在り自然の地勢ふよるやん●さて一人の
哥妓楼上ふいでゝ客ふ岩居を呼ぶよりまさて楼ふのぼり
余ハ京水とゝもふ此湯ふ浴ス楼上ふハ早〳〵三弦をひらせり浴し
をゝりて楼ふのぼるバ既ふ杯盤狼藉たり婢婢哥妓袖をつらね
素手弄糸朱唇謡曲迦陵頻伽の声外面如井の色臭を添まぶ

地獄谷遠然極楽世界とうるまり此妓どもを養ふ主人もまゝふ
來り居て從る料理人ふ臭〜う魚菜を調味させ〜さゝふ
宴を開く是主人俗中ふ雅を挾ぐ恒ふ文人を推慕ゆゑふ是
日もとゝふ來りて余ふ面識るを岩居ふ約せ〜とど此人容
ゆゑ自ら双坡樓と家号そその滑稽此一をもつて知るべし飄逸
洒落ふ〜〜よ〜人ふ愛せ〜る家の前後ふ坡ありとど双坡の字
下〜得て妙あり双坡樓扇をいだして余ふ句をもふ妓も持さる
扇を出て京水画をゑ〜〜余即興を書そこゝを見て〜岩居を
そでめのく〜壁ふ句を題〜更ふ風雅の興をもゑ〜りかくて
やゝ日も傾きけるゝば帰路を促〜けるふ哥妓どもふ草鞋ゆく來
りしとゝそゝふ〜〜がのゑりこゝふあるふとゝきまたてゝるを爭ふて
そきらづるゝゑ酔興ゑるゝば噪閙〜て途を行く細流ある所ふ

いてゝば紅唇粉面の哥妓紅裙を裹て涉る花姿柳腰の美人
等ゝ〜じをそいて水をゝるゝど余が江戸の目ふ最珍ら〜〜興
あり酔客ぢんくをうゝば酔妓歩く躍る古縄を蛇と〜駭せば
どさゝとうる妓悸〜〜片足泥田へふゝいゝを衆人顛然を此
途ハ凡て農業の通路ゑるゝば趣〜ゝぎ茶店もゑ〜半途ふ至りて
古き社ふ入りて中をゝ〜ふ一妓社の后ふ入り〜立ゝり石の水盤の
沽ゝる水を僅ふ掬手を洗ひ〜ふ私ふ去り〜ゑんそのまゝ樹下ふ
立せ玉ふ石地藏芽の前ふ並びたちゑゝ懐中より鏡を出て鉛粉
のゝゝゝげゝをつくゝひ唇紅をどさ〜て粧をゝたゝこゝゝの粧具を
りふ石佛の頭ふ置く外面女芽内心如夜叉のゝゝ〜めもゆゝゝば芽ハ
ゑふゝゝいりひ玉ゑんとゝつゝゝゝゝ日も已ふ下晡ゑればものくゝ色を
ちめく小千谷へゝりき

此紀行別ふ一本あり吾少北越旅談ふをゝゝ

正月鳥追櫓之図

図中山をあゝす所
皆雪なり

○越後の人物

板額女ハ加治明神山の城主長太郎祐森が室古志郡の産なり又三歳の小児も知る酒顛童子ハ蒲原郡沙子塚村の産今猶屋敷跡あり始ハ雲上山国上寺の行法印の弟子なり玄翁和尚ハ伊夜彦山の麓箭知村の産なり近世ふしぎ徳僧高僊和哥書画の人なりふしぎもあるべきなれども遠く四方ふ雷名せるもの也画人吳俊明のち江戸ふ居名をなせり近年相撲小越海鷲ケ濵ハ新潟の産九紋龍ハ高田今町の産関戸ハ次郎濵の産也常人ゆゑ力士の聞えあり上ハ頸城郡の中野善右エ門立石村の長兵衛蒲原郡三条の三五右エ門是等無双の大力ゆゑ人の知る所なり又鎧潟ふ近き横戸村の長徳寺谷根村の行光寺も怪力のきこえたり此人くハしくハ獨り鐘を軽く掛たゞしるべきのカハ有り人くなり又孝子なりハ上ハ村上小次郎新発田の菊女頸城郡の僧知良近くハ三嶋郡村田村の百合女百姓伊兵衛が新発田荒川村門左門百姓丑之助が塚原の豆腐賣春松鎌ゑが蒲原郡釈迦塚村百姓新六ふゞまも孝子の名一国ふ高かりき今存在するもありとや

百樹曰余越後ふいでゝハ板額あるひハ酒顛童子の旧跡をもたづゝ新潟をも一覧するゝ名の聞えある神佛をもをがみたてまつり寺泊ふのこる順徳帝の鳳跡義経夢函国師法然上人日蓮上人為兼卿遊女初君等の古跡もたづゝとおもひしゝふ越後ふ入りてのち気運順を失ひ年稍倹しゝ穀の價日ゝふ躍人気穏ゝもゝ心歸家ふわりく風雅をうしなひ古跡をも空ゝく過り惟平くなる旅人とのりくきて

おもびなる文雅の人をも刺同ぎりゝハ今ふ遺感なり嗟乎年の倹せゝをいうんせん

○無縫塔

蒲原郡村松より東一里來迎村ふ寺あり永谷寺といふ曹洞宗なり此寺の近くふ川あり早出川とのふ寺より八町ばかり下ふ觀音堂ありその下を流るゝ所を東光が淵とのふ永谷寺へ入院の住職あるべ此淵へ血脈を投げ入るゝ事先例ありさて此永谷寺の住職遷化の前年此淵より墓の石ふるべき圓き自然石を一ツ岸ふ出せを無縫塔と名づけつゝ此石出るべその翌年ふ必ず住職病死する事むかしより今ふいたるゝ一度も違ひる事なし此墓石大小ふよりて住職の心ふ應ぜぬ淵へ入せばその夜淵逆浪ゝ住職のこのむ石を淵ふ出したる事度くあり先年凡僧らふ住職ゝ此石を見て死を惧き出奔せゝふ翌年他国ふありて病死せゝとぞあるふ此淵ふ灵ありゝ天然の死を示すべゝ友人北洋主人蒲原郡見附の人家文をこのみ書をよくす件の寺を覽る話ふ本堂間口十間右ふ庫裏左ふ八間ふ五間の禪堂あり本堂ふいたる阪の左りふ鐘楼あり禪堂のうしろふ蓮池あり

上ふ坂あり登りゝ住職の墓所ありかの淵より出ゝたる圓石を人作の石の臺の脚あるふのせゝ墓とせ中央あるを開山とゝ左右ふ次第ゝゝ廿三基あり大なるハ徑り一尺三寸ばかり八九寸六七寸あるもあり大小ハ和尚の德ふ應ぜとのひつゝとぞ臺の高さハいづれも一尺ばかりありと語らるゝかの淵ふ灵ありとのふハむかしゝ永光寺のわとりふ貴人何某住玉ひゝふその内室色情の妬あゝ夫をうゝを東光が淵ふ身を沈め寃魂悪竜となりゝ人をあやまりしを永光寺の開山名を聞て血脈をうの淵ふ投ぜゝ化度ゝ玉ひゝ悪竜得脱あゝその礼とゝかの墓石を淵ふいづゝゝ死期を示せ是以今ふいたりても入院の時ハ淵ふ血脈を沈むと寺説ふつたへとぞ○さてまた我が隣國信濃ふも無縫塔の事あり近江の石亭が雲根志ふいふゝ前編灵異之部信濃国高井郡渋湯村横井温泉寺の前ふ星河とゝ幅三町ばかりの大河

あり温泉寺の住僧迂化の前年ハ此何中へ何方よりとも高さ二尺ばかりある自然石の方ハ〳〵うつくき石塔一ツ流れきたる実り彫刻せるごとく〳〵天然の物あり此石出ると土民ども温泉寺へ持せる事あり きのゝ〳〵翌年住僧迂化あり則ち〳〵ハ此石を立る九代以前より始り〳〵が代〳〵九代の石塔同石同様ゆく〳〵少〳〵も違ハず並びあり或年の住僧此塔の出る時天を拜〳〵いのる我法華千部讀經の願あり 今一年ハ〳〵満り何とぞ命を今一年延〳〵玉へと念じて〳〵の塔を川中の淵ハ投こたり何事もなく一年すぎ〳〵千部讀經のすゑ〳〵月ハ件の石又川中ハあらハるゝ其翌年をとゝ〳〵迂化ありとその次の住僧塔のぞむる時何の祟ひもなく淵へなげこむ幾度なげこむるも其夜そのまゝハいでゝ翌年病死あり〳〵とゞ此辺ハ〳〵是を無帽塔と名づく（以上一條の全文）越後ハ永光寺信濃ハ温泉寺事の相似る一奇怪といふべし〳〵○百樹曰牧之老人ゞ此草稿を視て無縫塔の縫の字義通ゞ〳〵誤字ゆゑとて剛示〳〵問ひけまゞ無縫塔と書傳るよ〳〵いひて〳〵ぬ雲根志ハ無帽塔とあり無帽の字も又通ゞ〳〵〳〵ハ無望塔ゆゑあらん住僧の心ゆハ死がいやさハ無望塔なるべ〳〵ハ無誓の一笑を記〳〵〳〵博識の確拠を鋏つ

○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺の一なり四大寺とハ滝谷の慈光寺村松ハ村上の耕雲寺伊弥彦の指月寺雲洞村の雲洞庵なり十三世通天和尚ハ霜堂君の議信の事親籍ゆく〳〵高徳の聞えハ今も口碑ハのこゝり 景勝君も此寺ハ物学び玉ひ〳〵とゞ一国の大寺なゝゞ古文書宝物等も多し〳〵その中ハ火車落の袈裟と

いふあり香染の麻と見ゆるハ血の痕のごとり是を火車落とく宝物とする由來ハむかし〜天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひしハ学徳全備の尊者ゆゑ〜もゝせり其頃此寺ハちかき三郎九村の農家ハ死亡のものあるハ時〜も冬の雪ふりつゞき雪吹も甚さりけるハ三四日ハ晴をまちて葬式をのべ〜ゐるハ晴ざりくるまゝ強くいとゆゑを〜且那寺なるゆゑ北高和尚をむかへ棺をいだし親族ハさま〜と人く蓑笠ハ雪、我あゆぎて送りゆくその雪途もや半ハいとりし時猛風俄ハおこり黒雲空を布満て闇夜のごとくいづくともなく火の玉飛来り棺の上ハ覆かゝり〜火の中ハ尾ハふさまたなる稀有の大猫牙をゝ〜し鼻をあき棺を目ゞけ〜とゝんとも人〜ことを見〜棺を捨まけのまろびつ逃まどふ北高和尚ハもとゝ〜も慎〜いろゝ〜口ハ呪文を唱大声一喝〜鉄如意を挙〜飛つ〜大猫の頭をうち玉ひ〜ハかゝらや破まとゝん血ゆゞそ〜ゆ〜〜衣をけゞ〜妖怪ハ立地ハ逃去りけまゝ風もやゝ雪もたゝて事なく〜葬式をいとなゝけりと寺の旧記ハのこまり此時めゝるを火車の法衣とそ今ハつゝふ

百樹曰余越遊〜〜塩澤ハ在〜時牧之老人ハ伴まて〜雲洞庵ハいとり塩沢より一里ばかり庵主ハ對話なゝ〜かの火車もとゝ〜の袈裟といふ物その外の宝物古文書の類をも一覧せりいとふも大寺なゝ〜祈禱の二字を大書〜する堅額ハ順徳院の震筆なりとぞ佐渡へ迂幸のとゝの震筆門前ハ直江山城守の制札あり放火私伐を禁ぜるの文なり庭中池のほとりハ智勇の良将宇佐美駿河守刃死の古墳在り〜を先年牧之老人施主とゝて新ハ墓碑を建とり永朽の善行ゆゑいのべ〜本文ハ火車といふハ呼謂夜叉なるべ〜夜叉の怪ハ唐土の書ハ〜散見せり

○年賀の哥

余六十一還暦の時年賀の書画を集む吾国八さゝゐり諸国の文人三都の名家妓女俳優來舶清人の一絶をも得さりしを收之ふ贈と いふ夏をゝるゝ人より人ふもとめて千餘幅ふおよぶり帖と色て 藏をひとせ是を風入をゝるゝの鋪ふつきたる坐〳〵きの障子をゝ〳〵き 年賀の帖を披き並べをきゝる所〳〵友人來り年賀の作意書画の評 ゐどゝりゐるをしも順礼の夫婦軒下ふ我が里言ふハ立けり吾が家 常ふ草鞋をつゝせをきそかゝる着ふ旅をゆゑをもを銭をあゝふ 此順礼の翁立さゝでとりをゝでゝるる年賀の帖を心あるさゐふ見られるが 云やうおよぶゐゐゝゝをゝらも順礼の腰をを弐申さんたんざゝ玉いを とふのを食のやうゐるをゝをゝふハ似気ゐたをゝのおゝつゐゐゝと思ひ ゐゝゝ短尺をゝりをとふゝゝけをゝ

三途川をゝふ先〳〵百年も君がもゝひをゝめやきん　五放舎

とをゝゝゝるふゝのをゝびも拙ゝゝゝ年賀ふハをゝふゝゝかゝりゐゐて 廻向とのひ順礼ふ五放舎と戯をてる名をもゝゝろゝ友人と倶ふゐゐど ろゐ歳ゝ宿を施行せんやゝゝりのゝゝりせんゐど友人をさゐゐゝふ をゝめゝれど杖をゝゝめゝゝゝ立さりけり国ハ西国とゝゝりゐゝりゐる ゐるものゆをゝやありけん

○逃入村の不思議

小千谷より一里あまりの山手ふ逃入村とゐゐあり（ゆゝ入りを里俗にゝゝゝとゝ）此村ふ大塚小塚とゝびゝ大小二ッの古墳双びあり所の傳〳〵ふ大なるを時平の塚と 小なるを時平の夫人の塚とゐふ時平大臣夫婦の塚此地ふ在ゝゝき由縁ゐき ゝゝハ論ふおよぶゝる俗説ゐり来ゝるゝゝども爰ふ一ッの不思議ありちのふ ゝゝをおゝゝゝゝ時平ふゆゝりの人越後ふ流さゝゐゝゝて此地ふ終り ゝるゐゆゐゐゐゐゐの不思議とゐゐハ昔より此逃入村の人手習をゝゝゝゝゝゝゝ

北高禪師勇氣圖

天満宮の崇あり〻〻一村の人皆無筆なり他郷ふ身を寄て手習
をさせ崇なり〻〻をうまとも村ふうまれ日を追て字を忘れ終ふハ無筆
とあるこのゆゑふ文字の用ある時ハ他の村の者ふたのみて書用を弁ぜ
又此村の子ども多ど江戸土産とて錦繪をもふる中ふ天満宮の繪
あるべうなるも神の崇りの兆あり事度〻ありしとぞさるべかの大
塚小塚を時平大臣夫婦の古墳なりと古くらひつたるも何ら由縁ある
事なるべ〻菅家の筑紫ふて薨じ玉ひるハ延喜三年二月廿五日なり
今を去る事百樹曰とふ今とのひ〻ハ牧之老人が此ものがき〻〻なる文政三年をいふ九百十五年前なり今ふひたり
て神天の明くなる事おそるべ〻尊むべ〻さて又ことふるわをる事
あり南豁が東遊記を見るふ南豁東遊〻〻津輕ふ居る時六七日も
風雨つゞき〻〻うち所の役人丹後の人や居ると旅店毎ふきび〻〻たづね
ゆゑ南豁あじふそのゆゑを問ひけるべあるべ〻ひとり當国岩城ハ人の

ありける安壽姫對王丸の生国なりさるべむ〻の人此御ふたりを岩城山
の神ふまつりて社今ふ在り此兄弟丹後ふさるよひ三庄太夫が為ふ困苦
なるゆゑふ丹後の人をひたすら〻ひ丹後の人此国ふ入るべ〻大風雨有て
日をとる事むなしよりの事なり丹後の人此国の堺をひづるべ風雨たち
まちやむゆゑふ丹後の人や居ると捜もとりとひたりと南豁子此事ふ遇
うりとて記せり右ふいふ兄弟の父岩城判官正氏在京の時讒ふあひて
家の亡びるハ永保年中の事なり今をさる事もよそ七百五十余年と
兄弟の怨魂今ふ消滅せざる事人知を以論むべるも百樹曰安壽ハ對王の妻なるハ塩麗廿三卷ふ見り姓考
西遊記前編景清が塚ハ日向ふあり世の知る処なり其母の塚ハ肥後国求麻
の人吉の城下より五六里わど東切幡村ふまつる此所ふ景清が娘の墳も
あり一村の氏神ふまつる此村なるべ〻盲人を忌む盲人他処より入るべ
必崇あり景清後ふ盲人ふなりしゆゑ母の夭盲人を嫌ふと所の人の

なりと記せりとあるの事逃入村の不思議に類せりされども件の
二ツハ社ありて丹後の人を忌。墓ありて盲人をきらふなり逃入村なる
墳あるゆゑに天満宮の神霊此地を忌玉ふやうなることをもつて考ふるに
かの古墳ハいよいよ時平が血脈の人なるべし
百樹曰余越遊して小千谷に在りし時所の人逃入村の事を語
りてかの古墳を見玉へ案内すべしといひしかど菅神のいみ玉ふ
所へ文墨の者強てゆくべきにもあらずと辞ば話をききしのみにてゆ
かざりきさて　天神様といへバ三歳の小児も尊び時平ときけバ此
御神を讒言したる悪人なりとて其悪千古に上下して哥舞妓
狂言にも作りなし婦女子も普く知る所なれど童稚女子ハその
實跡をしらざるが稀なりさればかかるをさなき冊子に此
御神の事を記すハいともかしこけれど逃入村の因によりてそれに

書載す
○謹で案るに菅原の本姓ハ土師なりしが土師の古人といひしが
光仁帝の御時大和国菅原といふ所に住るゆゑに土師の姓を菅
原に改らる菅神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼とまうしたてまつる（阿呼の御名に余が考あれども文長ければここにはぶく）仁明帝に仕へ玉ひたる文章博士参議是善卿の第三の
御子承和十二年に生れ玉へり七歳の時紅梅を御覧じて「梅の花
紅脂のいろにぞ似たる哉阿古が顔にもぬるべかりけり」十一の春（齊衡二年）父君
より月下梅といふ詩の題を玉ひたる時即坐に「月耀如晴雪梅花似
照星可憐金鏡轉庭上玉房馨」　御祖父清公卿御父是善卿の学業
を受嗣玉ひて文藝ハさらなり武事にも疎からざりしとなり
○清和天皇の貞観元年御年十五にて御元服同四年文章生に
挙られ下野の権掾になされ同十四年御年廿八御母伴氏身

まうり玉ひ陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身まうり玉へり御年六十九此時　菅神八御年四十一なり○寛平四年御年四十八類聚国史二百巻を撰ミ玉ふ和哥八菅家御集一巻詩文八菅家文章十二巻同後草一巻後草八銑栄朝臣の御作なり今も世ふ傳ふ大納言公任卿が朗詠集ふ入まゝ〳〵とる菅家の詩ふ「送春不用動舟車唯別殘鶯与落花若使韶光知我意今宵旅宿在詩家」此御作八　延喜帝いまゝ東宮なりし時令旨ありて一時の間ふ十首の詩を作り玉ひる其一ッなりこゝ御若年より數階を歴なひて後寛平九年御年五十三權大納言右□将を兼らる此時時平大納言ふ任ぜ〳〵ると左□将を兼菅神と並び立て執政なり此時大臣の官なりしゆゑ大納言ふて執政なり此年七月三日宇多帝御位を太子敦仁親王へ讓り玉ひ朱雀院へ入らせ玉ひ亭子院と申奉り御法体あるて八　寛平法皇とぞ

申奉る　敦仁親王を醍醐天皇とも後より八延喜帝とも申奉る御年十三年号を昌泰と改元を同二年時平公左□臣　菅神右□臣相俱ふ　帝を補佐〳〵奉らる時ふ時平公二十七　菅神五十四両公左右の□臣ゝなりて才徳年齢双璧をなさび故ふ心齟齬〳〵〳〵相和せぬ是　菅神の讒毒を得玉ふの張本なり○そも〳〵時平公八大職冠九代の孫照宣公の嫡男ふゝ代〳〵□臣の家柄なりしゆゑふ〳〵なぞ　延喜帝の皇后の兄なりしゆゑふ若年ふて□臣の貴重ふ職しなり此人の乱行の一ッを言ハ叔父なる大納言国経卿八年老叔母なる北の方八年若く業平の孫女ふて絶世の美人なり時平是ふ憑くまた夫人もまゝ〳〵夫の老るを嫌ふの心あり時平或日国経の許ふ宴〳〵醉興ふまぎ〳〵〳〵く夫人を貫ん乱ひ〳〵を国経も醉ゝなりしバ戯言とおもひ〳〵ゆ〳〵しくなりさて国経が醉所なるを見て〳〵叔

母を車ふいごき入まてく立うつり此腹ふ生まてるを中納言敦忠とし
時平の不道此一を以て其餘を知るべしかゝる不道の人うまれ
寛平法皇の帝の御父御心ゆハ時平の任を除き　菅神御一人ふ国政
をまつりもせ玉ハんとのもゝ〳〵めしあしふ延喜元年正月三日
帝亭子院へ朝覲のをりゝ御内心を示し玉ひしふ　帝もふ
まつふをこゝび玉ひ其日　菅神を亭子院ふめ〳〵事のよしを
内勅あり〳〵ふ　菅神固辞〳〵たまひしふ許し玉ハざりけり
同月七日従二位ふ昇事いとふしてゝ時平公の聞ふふまて〳〵ゝ事ふ先
じ〳〵　帝ふ讒もるをハ君の御弟齊世親王ハ道實の女を室
道〳〵〳〵寵遇厚し是以君を発〳〵〳〵親王を立国柄を一人の手
ふ握んとの密謀あり　法皇も是ふ應じ玉ふの風説ありと
言を巧ふ讒〳〵けり　時ふ延喜帝御年十七なり　皇后ハ

時平公の妹なまゝ内外より讒毒を流して若帝の御心を動〳〵
奉りしるあり○さて時平ゞ毒奏ふゆ〳〵中りて同月廿五日左降の
宣旨下りて右□臣の職を削り従二位ハものごと〳〵太宰權帥と
文官筑紫へ左遷ふ定め玉ひ　寛平法皇此事を聞〳〵めして大ふおど
ろかせ玉ひ御車ふもめし玉ハゞ俄ふ御沓をそめ玉ひて清涼殿
ふ立せ玉ひ斯とヤせとおもせありしかども左右の諸陣警固して事
を通ぜゞ是も時平ゞ讒ふ一味せる菅根の朝臣ゞたゝ〳〵ひとりゆ
法皇ハ草坐玉ひ終日庭上ふ御〳〵晩ふいたるまで〳〵本院へ還□
玉ひ○菅神ふ御子二十三人おはせり御男子四人ハ四方へ流し玉ふ
是も時平ゞ毒舌ふよりまつり姫さまハ都ふとゞまり幼きふふたり筑
紫へおくだりの年頃愛玉ひる梅ふきへ別れををしゝたまひて
「東風吹ば匂ひをこせよ梅の花主なしとて春な忘そ」此梅つくし

飛さる事ハ挙世の知る処なり又櫻を「櫻花主を忘るゝものゝ〜ぶ次
うん風ふきとつてゝせよ」○斯て延喜元年辛酉二月朔日京の高辻の
御館をいで玉ひて津の国須磨の浦ゝ日を移〜つゝ〜抵りたまへり
（ゆくさをいでゝよりつゝ〜いくつの日〜までのゆくすゑを菅神の筆記せさるなのひさるを須磨の日記とて今も世ふのことなり一説ふ偽書とも）
ゆく〜「離家三四月　落涙百千行　万事皆如夢　時〜仰彼蒼」
御哥ふ「夕ざるべ野ふも山ふも立烟りうゆげきよりとたのえまとりけり」
又雨の昼「夕の朝かくる人もあけとゆきそ〜ぬる衣ひるより〜もるき」
（ぬるぎぬとハ沈実のつゝかくるをいふなり）○つゝしふいとり玉ひてハ不出門行とらの詩を作り玉ひて
寸歩も門外へいで玉ハぬ是朝延を尊恐御身の謫官なるをつゝき
たるものゝ名なり御句ふ「都府楼纔看瓦色　観音寺只聴鐘声」
○菅神　延喜元年二月朔日都を出玉ひて筑紫へいとり玉ひ〜ハハ
月なり是より前の御詩文を菅家文草とらひ十二巻左遷より後

のを菅家後草とゝ一巻今も世ふつゝふ後草ふ九月十三夜の題
ゆゑ「去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨断腸　恩賜御衣今
在此　捧持毎日拝餘香」此御作ふ注ありその趣ハ○去年とハ
昌泰三年なり延喜元年の一年まへ其年の九月十三夜　清涼殿ふ時候あり
時秋思といふ題を玉ハりしふ詩の意ふことよせゝ諫たてまつりしふ
其いさめを容玉ひよろこびせのひて御衣を賜ひるを此配所ふもち
ゝでりゝ毎日御衣ふのこりたる餘香を拝ゝと帝をもとひ御恩浅
忘ゝ玉ハざる御心の誠を作り玉ひるなり此一詩をもつゝも無
實の流罪ふ所〜ゝ露ゝりも帝を恨ゝ玉ハざりしを知るべ〜朝
廷を怨ゝのひゝ魔道ふ入り雷公ふなり玉ひとらふ妄説ハ次ふ
弁ずべ〜○高辻の御庭の櫻枯さりとゝ玉ひて「梅ハ飛櫻ハかゝ
世の中ふ松ゝりこゝつまるりけり」○さて太宰府ふ謫居ゝのふ事

文淵堂蔵

三年ホ〜〜〜延喜三年正月の頃より　御心例ゐ〜ぞ二月廿五日
太宰府ホ薨ゞ玉ひ〜り御年五十九御墓ハ府ホちゝき四ッ辻といふ所
ホ定め　御櫬をいゞ〜ゝるホ途中ホとゞまりてうごゝぞ則その所ホ
葬り奉る今の　神廟是なり○延喜五年八月十九日同所安樂寺
ホ始ゝ〜　菅神の神殿を建らる味酒の安行といふ人是をうけ
たまはる同九年神殿成る是よりさき四人の御子配流をゆるされ
玉ひかの〜故の位ホかへされ玉ふ○神去玉ひ〜のち水旱風雷の天
變ちゝ〜〜〜〜〜人の心安〜〜ぞ是ぞ　菅公の崇りなるべんなど
風説ちけるとゝや○菅神薨去より七年ホあたりゝ延喜九年
四月左□臣藤原時平公薨ぜ歳三十九又一男八条の大將保忠その
弟中納言敦忠ちゝび時平の女　延喜帝の女御なり　孫の東宮まで〜も相つぎて
薨ぜらる又時平の讒毒ホ荷擔ちる菅根の朝臣ハ延喜八年十月

のを菅家後草とゝ〜一巻今も世ホつゝふ後草ホ九月十三夜の題
ゆゑ「去年今夜侍清涼二　秋思詩篇獨斷腸　恩賜御衣今
在此　捧持毎日拜餘香」　此御作ホ注ありその趣ハ○去年ちゝ
昌泰三年なり　延喜元年の一年まへ　其年の九月十三夜　清涼殿ホ時候あり
時秋思といふ題を玉ひ〜ホ詩の意ホことよせゝ諫たてまつり〜ホ
其いさめを容玉ひよろこびせのひて御衣を賜ひなるを此配所ホもち
ゐ〜〜〜毎日御衣ホのとりたる餘香を拜ちと帝をちゝび御恩幾
忘ま玉ひぐる御心の誠を作り玉ひなるなり此一詩をもつゝも無
實の流罪ホ所〜〜露だなりも帝を恨ゝ玉ハざりしを知るべ〜朝
廷を怨ゝのひゝ〜魔道ホ入り雷公ホなり玉ひなりとのふ妄説ハ次ホ
弁ぜべ〜○高辻の御庭の櫻枯なりとき玉ひて「梅ハ飛櫻ハかゝ
世の中ホ松だなりことそつまなりけま」○さて太宰府ホ謫居ちのふ事

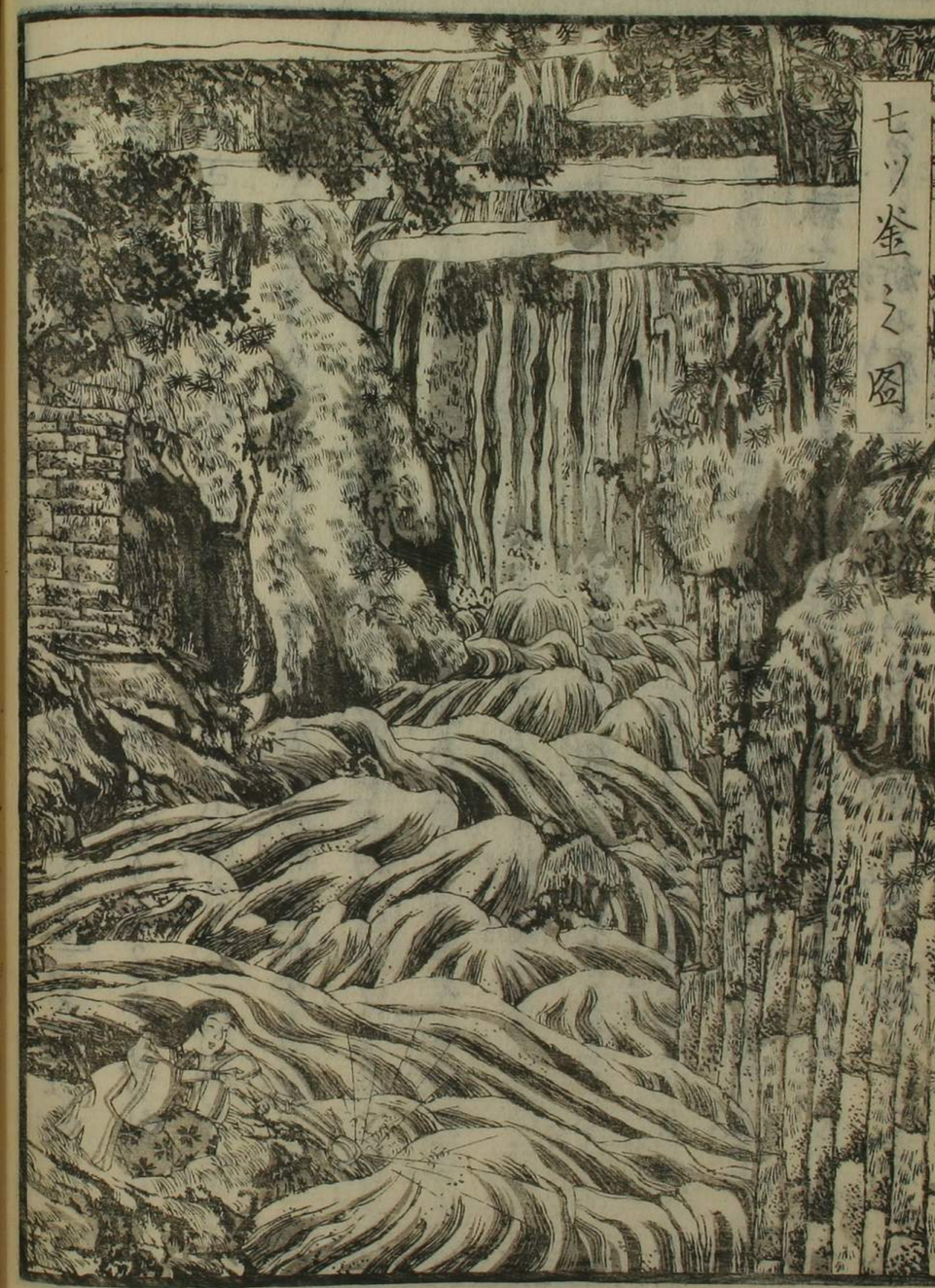
三年ハ〳〵延喜三年正月の頃より　御心例ならぬに二月廿五日
太宰府ハ薨ぜ玉ひ御年五十九御墓ハ府ハちかき四ッ辻といふ所
ハ定め　御棺をいだ〳〵ハ途中ハとどまりてうごかぬ則その所ハ
葬り奉る今の　神廟是なり○延喜五年八月十九日同所安楽寺
ハ始さ〳〵　菅神の神殿を建らる味酒の安行といふ人是をうけ
たまはる同九年神殿成る是よりさき四人の御子配流をゆるされ
玉ひおの〳〵故の位ハかへされ玉ふ○神去玉ひ〳〵のち水旱風雷の天
変さま〳〵あり〳〵人の心安からぬ是ぞ　菅公の崇りなるらんなど
風説さけるとかや○菅神薨去より七年ハあらため延喜九年
四月左□臣藤原時平公薨ぜ歳三十九又一男八条の大将保忠その
弟中納言敦忠ならびに時平の女延喜帝の御女の孫の東宮までも相つぎて
薨ぜらる又時平の讒毒ハ荷騰ある菅根の朝臣ハ延喜八年十月

死ぬ其ほかの事どもをも　菅神の崇りと世ハ流布せ〳〵ハ
菅公の冤謫を世の人哀感ぎたるやうなるかとや○延長元年三月保
明太子薨去時平の孫東宮ハ○同年四月廿日贈位正二位本官の右□臣
ハ復〳〵玉ふ神去より二十年○一条院の御時正暦四年五月廿一日
菅神ハ正一位左□臣を贈らる菅神百年御忌あるる○同年閏十月十九日
大政□臣を贈らるまたこの此　御神の御位ハ正一位大政□臣とあるべ
後年屢　神夢の赫〳〵たる徴あり〳〵ハよりて　天満宮　或
自在天神の贈称あり○ともに醍醐天皇ハ在位廿三年百廿代の御皇
統の中ハ殊ハ御徳達さ〳〵ゆゑ延喜の聖代と称し御在位の
久しきゆゑ　延喜帝とも申奉る　御若冠の時ハやがて賢者
の聞えある重臣の　菅公を時平大臣が一時の讒口を信じ玉ひて
其實否をも糺し玉はぬ卒ハ　菅公を左遷ありしハ　御一代の

失德とやらんべきものを　菅神の恨み玉ハざりしハ配所の詩哥ホ
てもちゝる　菅神ハうゝゝ玉ハぞとも賢德忠臣の冤謫を天のい
きどをりて水旱風雷の異變讒者奸人の死亡ありしるゝん俗子ハ是
を　菅神の怨灵とするハ是又　菅神の賢行ホ瑾つけるゝ事ホ
ども竊ホ謂ゝ賢者ハ旧悪をおもハぞといふも事ホこそよけ冤謫
慄愁のあまり讒言の首唱する時平大臣を肚中ホ深く恨み玉ひ
ゝもちるべゝゝ本編ホらん逃入村を神の忌玉ふ其徴とするの
一ツなるべゝ　○神去り玉ひゝより廿八年の後延長八年六月廿六日
大雷清涼殿ホ隕て藤原清貫大納言平稀世右中弁其外時候の人々
雷火ホ即死す　延喜帝常寧殿ホ渡御ありて雷火を避たまふ
是をも　菅神の祟とするハいよゝゝ非説なりと安齋先生伊勢平藏の
菅像辨ともいへり　○太宰府より一里西ホ天拜山あり　菅神あの

山ホのぼりて朝廷を怨む告文を天ホ捧ゝ祈り雷神となり
玉ひゝとらんハ賢德の御心をもゝぶる俗子の妄説を今ホ傳へたる
なり　和漢三才圖會ホも實ゝ記ゝるハ不出門行の御作ホ
心を深めぎるゝ事ホあらん　○法性坊尊意叡山ホ在ゝ時　菅神の
幽灵來り我冤謫の夙懇を償ともとハ願くハ師の道力をもつて拒こと
なかれ尊意曰卒土ハ皆王民なり我ゝ　皇の詔をうけ玉ハゝぞ
避るホ所なゝ　菅神怖色あり　適柘榴を薦　菅神哺を吐き
燭をなゝ玉ひゝとらんハ故事ハ元亨釈書の妄説ホ起る此書ハ今天保十年より五百廿年前元亨二年東福寺の虎関和尚の作なり　かゝる奇怪の事を記せハ佛者の筆癖なりと安齋先生もいへり　○白太夫とらんハ伊勢渡會の神職　菅神文墨ホ於
格外の懇友なりゆゑホ北野ホ祀りゝ今も社あり此御神の事を作りたる俗曲ホ梅王松王櫻丸の名ハかの梅ハ飛の御哥ホ　○北野の御社の始ハ天慶五年六月九日より

勅命ふよりて建創其起りハ西の京七條ふ住する文子とのふ女ふ神
説あり（北野縁起ふつまびらかなり）○世ふ渡唐の天神とらひて唐服ふ
梅花一枝を持玉ふを画く故事ハ佛鑑禪師（聖一国師と名を東福寺の開山国師号の始祖）
博多ふ住玉ひしる跡の地中より掘いだしたる石ふ菅神の灵唐
土へ渡り玉ひて經山寺の無準禪師ふ（聖一国師の師なり）法を受玉ひて日本へ
歸り玉ひしと件の石ふ彫つけあしと古書ふ見えたるを按とし
渡唐の神影を画き傳へたるなり此事固妄説なりと安齋先生の
菅像辨ふ（菅家聖廟傳暦とこの書の附録ふ沙門師嵩が○菅神
菅神渡唐記あり其説孟浪ふ属す）
左遷の實跡を載せるハ○日本紀畧（抄録ふ巻序を失意せり）○扶桑畧記（巻廿三）○日本史
百廿三の列傳五十○菅家御傳記（神統菅原陳經朝臣御作正史ふよりもとしてれバ証とす）其餘虚實混合し
なる古今の書藉枚挙ふいとまなし○本朝文粹ふ挙たる大江匡衡の
文ふ「天満自在天神或ハ塩梅於天下輔導一人帝の御を或日月於天
上照臨萬民就中文道之大祖風月之本主也」云云大江家ハ
菅原家と俱ふ朝廷ふ累世たる儒臣なりたるふ菅神を崇
称する事件の文の如し是以凡文道ふ関者此御神を崇さ
んや信ぜざらんや○おもふに菅神を祀る社ふ多くハ雷除の議
府とらひ物あり此御神雷の浮名をうけ玉ひしるゆえ神灵雷
を忌玉ふゆえふ此まぎれなくも験あるべし○さて如件條説たるハ
本編ふらへる逃入村の神灵の事ふ因て實跡の書を摘要し
て御神の畧傳を児曹ふ示たるなり固ふ学のもくさなるまバ要跡の
漏たるも説の誤謬たるもあるべしあるべしと謹て附記を○再按るふ
孔子の聖なるもその灵ハ生る時よりも照然とし〳〵その墓十里
荊棘を生ぜず鳥も巣をかけ関羽の賢なるも死してハ神と
なりて祈ふ應ぜ是則生ハ形を以て運り死てハ神を以て運ゆえ


七ツ釜之図

ありとかや（文海披沙の説）菅神も此論ふ近し逃入村の事を以ても千年ふちうの神灵の赫々たること仰ぐべし敬ふべし蓋冥々わが年月を置ずとせばいかば百年も猶一日の如くなるべし（菅公の神灵なる事和漢ともに多しさのみならず）

○田代の七ツ釜

魚沼郡の官驛十日町の南七里計妻在庄の山中（此へんすべて上ずりとふ）ふ田代とふ村あり村を去事七八町ふ七ツ釜とふ所あり（里俗滝つぼを釜とふ）滝七段ある内ふて七ツ釜とよびきたるり銚子の口不動滝などふも七ツ釜の内ふて妙景奇状筆をもつて云べからず第七番目の釜の地景を爰ふ圖せるをこそ其大槩をあらべし此所の絶壁を堅御号横御号とふ里俗伊勢より御師の持きたるもろもろの箱を[illegible]さまとふ此絶壁の石うの箱の状ふ似るをもつて斯ふなりそのふ似たりとふ此ぜつへきの石どもの落たるを視るに厚さ六七寸計ふして平なり長さ三四尺ばかり長短ハひとしからず石工の作りたるが如し此石数百万を堅ふ積重ねて此数十丈の絶壁をなせり頂ハ山ふつづきて老樹鬱然たり是右の方の堅御かうなり左りハ此石の寸尺ふたがはざる石を横ふ積たるきわ数十丈をなせる事右ふ同ド七のきわ人ありて行儀よくつきあげたるごとく寸分の斜なし天然の奇工奇妙不可思議なり此石の落たるを此田代村の者さまざまの物ふ用ふ片石ふても他所ふ用ふるハ祟あり事度々なりとぞ余文政三年辰七月二日此七ツ釜の奇景を尋て目擊したるを記せ天の范々たる他国ふも是ふ似たる所あるべし姑くその類を示せ

○百樹曰余仕ふ在し時同藩の文学関先生の話ふ君侯封内の丹波笹山山ふ天然ふ磨の状なる石をつきあげ柱のごとくを並て絶壁をなし満山此石ありとかやこれ又西国の山ふ人の作りたるなるべし磨の状の石を産する所ありと春暉が随筆ふ見たる事

ありき今その所をおひひらさど

○又尾張の名古屋の人吉田重房が著し給ふる筑紫記行卷の九ふ但馬國多氣郡納屋村より川舩ゆき〳〵但馬の温泉ふ抵る途中を記し給ふ條ふ曰。猶舟ふのり〳〵行。右の方ふ愛宕山。宮島村野上村。石山地名などと追續き〳〵あり此石山の川岸ふ臨とる所ふ奇し〳〵石あり其形ち磨磐の如く上下平ふし〳〵周ハ三角四角五角八角等ふして石工の切立〳〵如く色ハ青黑〳〵是を掘出し給ふる跡もありて洞のごと〳〵天下の廣きゆハ珍奇なる事おもきものありけり云〻是も奇石の一類なるべ筆の次ふ出るつ

北越雪譜二編卷之三終